

大阪狭山市文化財報告書 6

大阪狭山市内遺跡群  
発掘調査概要報告書 2



1 9 9 2 . 3

大阪狭山市教育委員会

## はしがき

大阪狭山市内には、史跡名勝狭山池をはじめとする多くの文化財があります。最近では、中世の城館跡である、池尻城跡が発掘され多くの人々の注目をあびました。ところが、これまで農村地帯であった本市内においても、近年急速に開発がすすめられ、埋蔵文化財に対する緊急調査の必要性が増してきました。大阪狭山市教育委員会では、このような状況に対処するため、平成2年度より国、大阪府の補助金を受け、本格的に個人住宅の建築に先立つ埋蔵文化財の調査を開始いたしました。今年度は狭山藩陣屋跡を中心に調査を実施し多くの成果をあげることができました。

今年度の調査にあたっては、建築主の皆様や、調査地周辺の皆様に多くの協力をたまわりました。厚くお礼を申し上げるとともに、今後とも文化財保護に一層のご支援をお願い申し上げます。

1992年3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 上谷三郎

## 例　　言

1. 本書は大阪狭山市教育委員会が平成3年度国庫、府費補助事業として実施した大阪狭山市内所在の埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。調査は平成3年4月1日から、平成4年3月31日まで行ったが、本書に報告し得たのは平成4年2月初旬までの調査結果である。それ以後実施した調査の結果については来年度の報告書において報告することにしたい。
2. 調査は大阪狭山市教育委員会社会教育課市川秀之を担当者として実施した。調査に当たっては若宮美佐、山崎和子、井上昌代、鬼塚理子、桜淵繁太郎、高林正男氏、をはじめとした諸氏の参加、協力を得た。また地形分類図については、豊田兼典先生（大阪府科学教育センター指導主事）の作成されたものを利用させていただいた。記して謝意を表する次第である。
3. 本書の執筆、編集は市川が行ない、植田隆司（大阪狭山市教育委員会社会教育課）、若宮がこれを補佐した。

## 目 次

はしがき 大阪狭山市教育委員会教育長 上谷三郎

例 言

1.はじめに .....	1
2.狭山藩陣屋跡 .....	3
3.まとめ .....	13

## 挿図目次

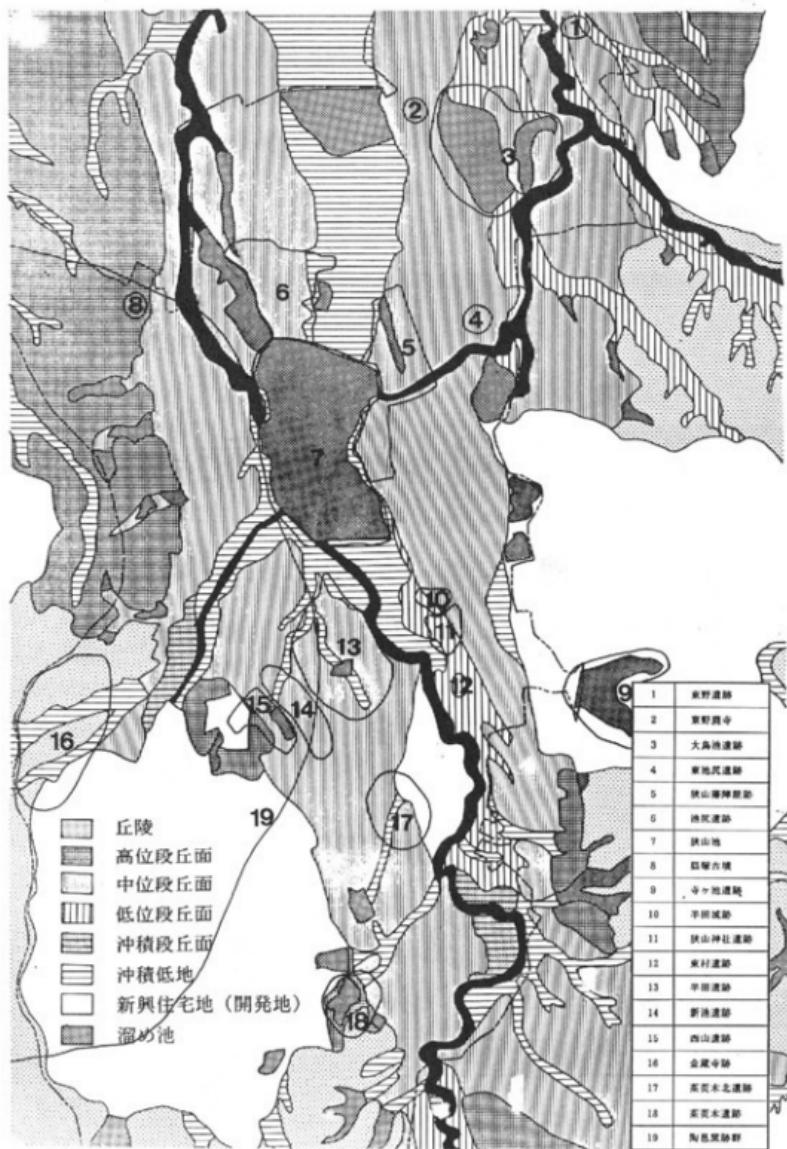
第1図 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布 .....	2
第2図 狹山藩陣屋跡調査区位置図 .....	3
第3図 狹山藩陣屋跡9 1 - 1区遺構平面図 .....	4
第4図 狹山藩陣屋跡9 1 - 1区瓦窯平断面図 .....	5
第5図 狹山藩陣屋跡9 1 - 2区遺構平断面図 .....	7
第6図 狹山藩陣屋跡9 1 - 2区出土遺物実測図(1) .....	8
第7図 狹山藩陣屋跡9 1 - 2区出土遺物実測図(2) .....	9
第8図 狹山藩陣屋跡9 1 - 2区出土遺物実測図(3) .....	10
第9図 狹山藩陣屋跡9 1 - 3区遺構平断面図・出土遺物実測図 .....	12

## 1. はじめに

大阪狭山市は、大阪市等のベットタウンとしての都市機能を持つため、ことに近年、個人住宅やマンションの新築、増築がめざましく増加している。平成3年度もこの傾向はやはり継続しており、多くの発掘届が提出されている。

本報告書においては平成3年度、本市教育委員会が発掘調査を実施したもののうち、個人住宅等の建築に先立つ調査の結果を報告することにしたい。ただし本市においては狭山ニュータウンなどすでに大規模造成がなされている箇所における新築増築については発掘届提出のうえ、立合調査を実施することとしている。その結果、遺物、遺構等が検出されなかった例も多数あるが、これらについては報告を省略した。以下、市内遺跡の概要を述べた後、今年度調査の概要を報告することとした。

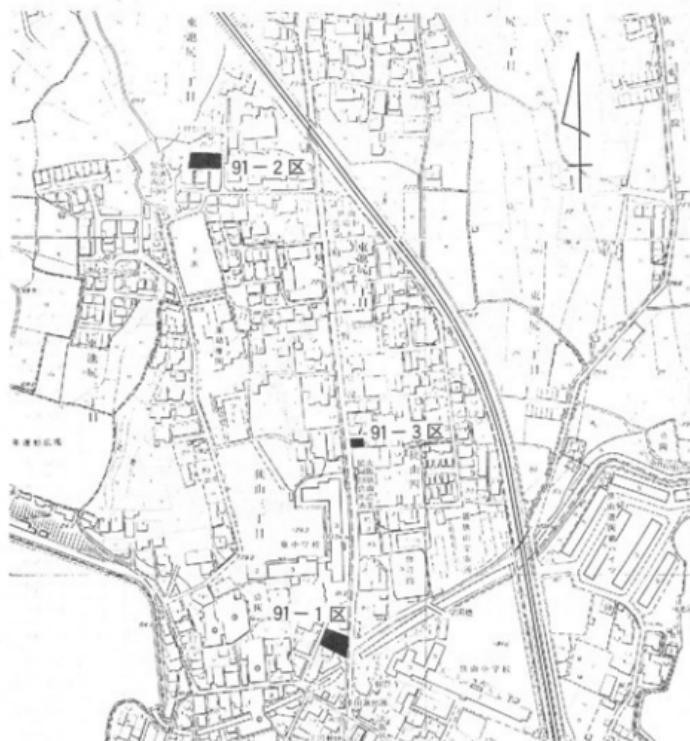
大阪狭山市の遺跡分布、地形分類については第1図に示した通りである。本市の西半分を占める高位段丘には古墳時代に多くの須恵器窯が築かれている。これらの須恵器窯は6世紀以降、須恵器需要の拡大に伴ってさらに低地の谷地形や、段丘崖を利用して築かれるようになる。また狭山池周辺の中位段丘面は、狭山の人々の主要な生活の場となったところであり、延喜式にも記載された狭山神社、南北朝期の城館である池尻城跡、白鳳期の寺院である東野庵寺、近世に狭山北條家が陣屋を構えた狭山藩陣屋跡など古代から近世にかけての遺跡が多く分布している。また西除川（天野川）にそった市内中央部の低地には日本最古の灌漑用溜池といわれる狭山池が存在するが、そのほかには遺跡はあまり確認されていなかった。ただし本年度、狭山池調査事務所が実施した発掘調査においては、狭山池北側の谷底平野においても古墳時代前期の水田や鎌倉時代の集落が確認されており、今後個人住宅の建築についても注意が必要となつた。さらに東除川にそった低地や小規模な開折谷を利用して多くの溜池が築かれているが、これらの岸には広範に須恵器窯が分布しており、また池底には石器の散布がみられるものが多い。現在、個人住宅その他の開発が進められているのは、中位段丘面を中心とする地域であり、今年度実施した調査もこの地域に集中している。



第1図 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布

## 2. 狹山藩陣屋跡

今年度実施した発掘調査は狭山藩陣屋跡に集中している。近世には狭山北條藩の陣屋がおかれて、近代以降も、狭山の中心的な住宅地であったこの地では、近年既存の住宅の建てかえが多く、それが発掘件数の増加につながっている。狭山藩陣屋跡では、昭和62年以降、大阪府教育委員会、大阪狭山市教育委員会によって、発掘調査が進められてきた。昭和62年には下屋敷において下級藩士の屋敷跡と思われる箇所を発掘し多くの遺物が出土している。その後の上屋敷、下屋敷において年間数件ずつ調査を行なってきていている。これまで狭山藩陣屋跡の構造について幕末期の家宅配置などが、文献から知られているが、近世の建物は礎石の上に柱を乗せるものが多いため遺構としての把握が困難であり、考古学的知見を文献面での知識に合一するまでには至っていない。本報告書に掲載した調査地のうち、当遺跡内に含まれるもの的位置は第2図の通りである。



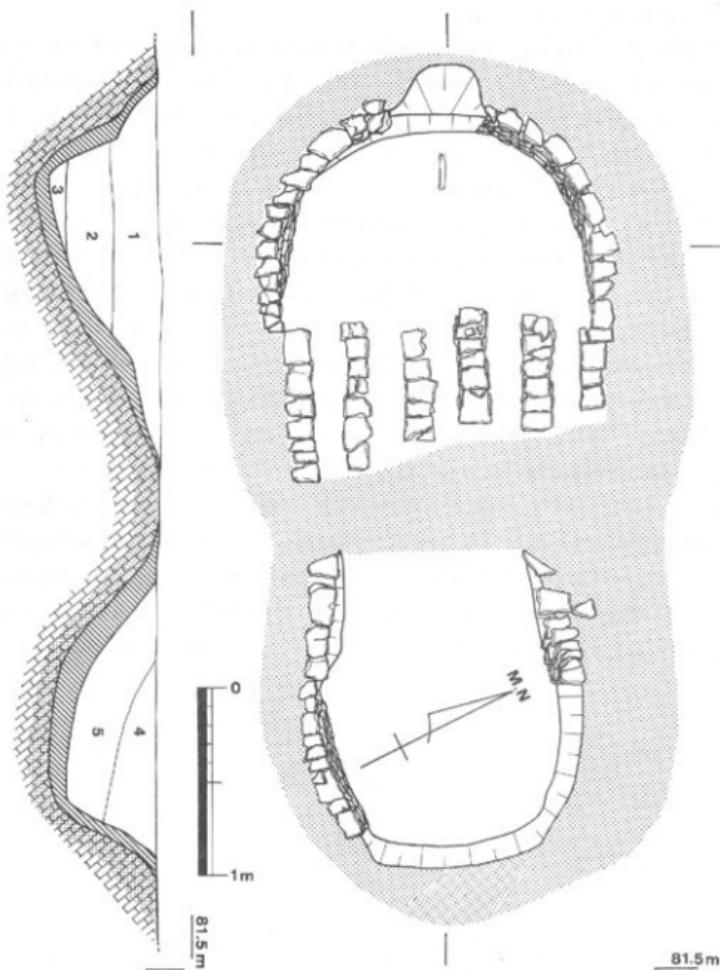
第2図 狹山藩陣屋跡調査区位置図

(狭山藩陣屋跡 91-1区)

大阪狭山市狭山三丁目2436に所在する。近世に築かれた狭山藩陣屋跡は、東除川を境として、上屋敷と下屋敷にわかれていたが、本調査区は東除川の北岸に位置しており、上屋敷の南端にあたっている。当初5m四方の調査区を設定し調査を開始したが、その他の敷地の南側に真っ赤に焼けた土が見られたためその周辺においても掘削を行ない、結局小さな二つの調査区を設定することとなった。北側の調査区については、計8つのピットを検出した。うちピット1とピット3については、埋土の中に多くの炭化物が含まれていた。また南側においてみられた焼け土は、遺構の精査を進めるうちに、瓦窯の下部構造であることが明らかになってきた。瓦窯は縦(東西方向)4.2mの楕円形を呈している。ただし、底部は楕円の中心付近で現状地盤の高さまで浅くなっている。つまり楕円自体が東、西二つに分割されており、西部においては幅が1.7m、東部は1.3mで西部の方がいくぶん太くなっている。底部は青灰色に還元した土であり、側面には平瓦を10枚程度平づみにして、窯壁としている。瓦の積み方は上に正しく積み上げるやり方ではなく、下の瓦のつぎ目に、上段の瓦をのせる積み方であるが、それほど明確な規則性はみられない。平瓦は一辺が20cm程度の小型のもので、その大半は破損している。おそらく破損して出荷できない平瓦を窯壁としたものであろう。最大の深さは西部が87cm、東部が79cmでこれも西部の方が若干深い。また西部には四列に並んだ瓦の列が残っていた。残存していたのは、最大のもので長さ75cm、高さは中心部へいくほど徐々に低くなるが15cm程度である。また西部のもっとも端の部分には壁の部分に瓦はみられず。その部分は半円形にえぐれていた。これはたき口と考えられるが、同様の遺構は東部にはみられなかつた。



第3図 狹山藩陣屋跡 91-1区遺構平面図



- 1. 褐色砂質灰土
  - 2. 暗橙色燒土
  - 3. 暗灰褐色炭灰
  - 4. 棕色砂質灰土
  - 5. 暗灰褐色炭灰
- 青灰色砂砾土(燒成床面、還元層)
- 明橙色礫砂土(中位段丘砾層、酸化層)

第4図 狹山藩陣屋跡9 1-1区瓦窯平断面図

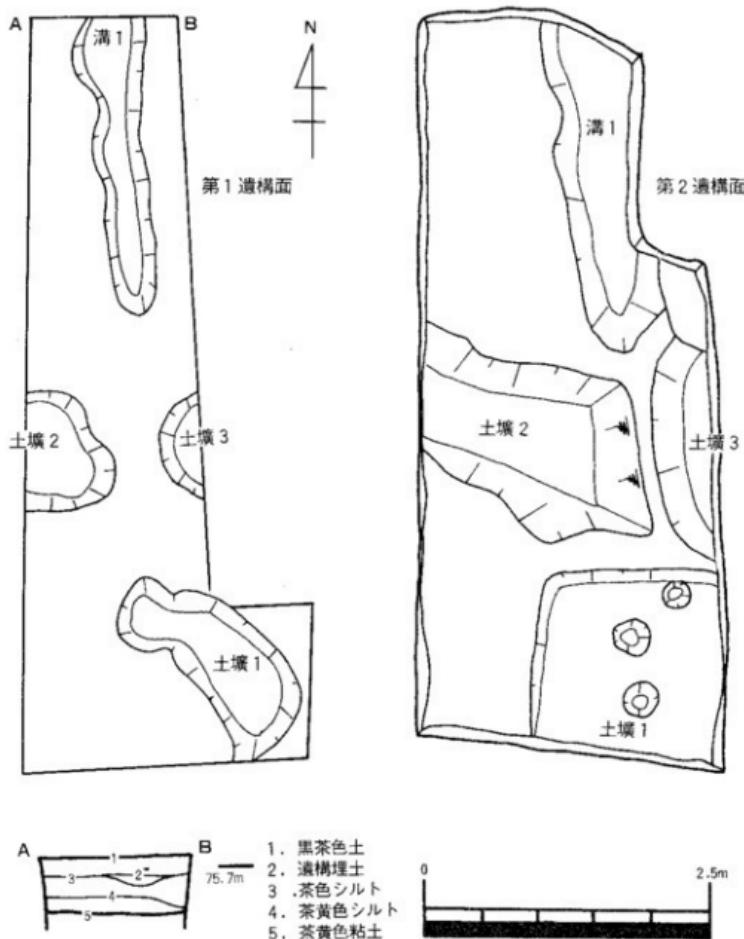
全体的に壁は東部において、大きく崩れているようであり、西部においてみられる構造が元來のものであったと考えられよう。また窯の底面、東部のたき口の近くにおいて小刀と考えられる鉄製品一点を検出している。作業の中で窯内部に置き忘れたものと考えられるが、あるいは窯の廃棄に伴って魔よけなど呪術的な役割を以て窯内に置かれたものかもしれない。窯の概要は以上の通りである。本来の窯は地上よりも上に当然存在したものと考えられるが、今回の調査結果だけではそれを復原することは不可能に近い。窯内より出土した瓦、あるいは壁に使われた瓦は、全て小型の平瓦であり、刻文その他がみられるものはなかった。瓦の形体から明治を中心とする近代の所産と考えられよう。さてこのような下部構造を持つ近代の瓦窯ということになるとこれはいわゆるダルマ窯であると考えてよさそうである。ダルマ窯は卵を半分に割ったような外見をしており、その形態から名前が付けられている。民俗例では燃焼室が一つのもの（愛媛県越智郡の菊間瓦など）と、燃焼室が二つあって両側のたき口から火を燃やすもの（大阪府泉南郡岬町の谷川瓦）の2つの種類があったようである。たき口が一つのものはたき口のレベルが一段低くなっている左右対象ではないので、今回検出した遺構は燃焼室が二つあるタイプのものであると考えられる。またダルマ窯の燃焼室と焼成室の境界には瓦などでつくられた柱が4本ないし5本たっているのが普通である。これは焼成室の温度を均一にするための工夫と考えられるが、本調査区の瓦窯においてみられた四列の瓦もこの分炎を目的とした柱であると思われる。ダルマ窯は近世から近代にかけて沖縄県を含む全国に普及していたと考えられるが、その発生、変遷についてはこれまでの発掘例も少なくはほとんど不明の状態である。昭和30年頃まで大阪府下においても所々でみられたダルマ窯であるが、最近では機械窯におされ現在ではほとんどその姿を地上から消そうとしている。近世は瓦の民間普及にとって一大転機となった時代であり、それに対してダルマ窯の果たした役割は非常に大きなものであったと考えられる。大阪狭山市内においてもかつて瓦作りは所々で営まれており、地域の産業の歴史をふりかえるうえでもダルマ窯の占める位置は大きい。本資料がダルマ窯の歴史解明の一資料となることを祈るとともに、今後も市内の瓦窯の調査を継続していく必要を感じている。

#### （狹山藩陣屋跡 91-2区）

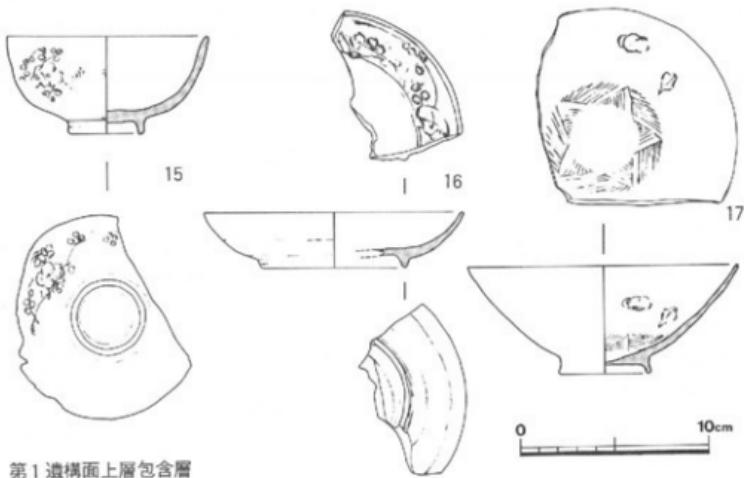
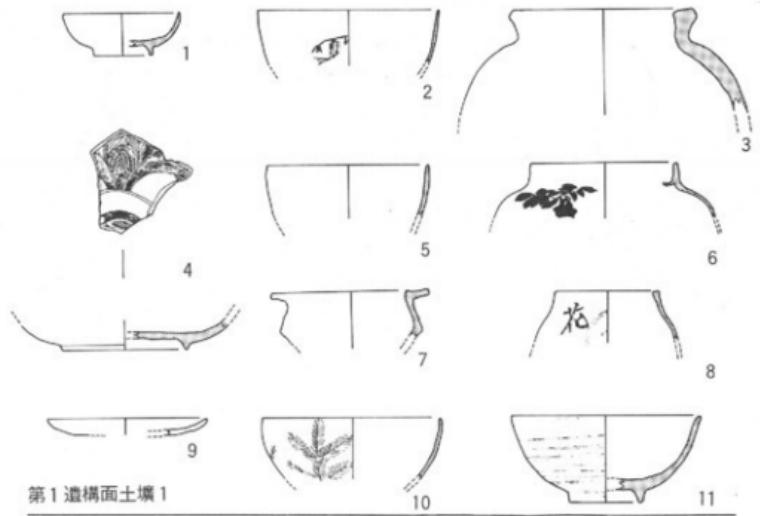
大阪狭山市東池尻三丁目2547に所在している。本調査区は、狹山藩陣屋跡上屋敷のもっとも北の部分に位置している。調査区の西側はすぐ段丘崖となっており、眼下には狹山池水下に展开する谷底平野が広がっている。明治初期に作られた絵図によれば、この場所は狹山藩の家老船越家の屋敷地となっている。

調査は長さ6.5m、幅1.5mの調査区を設定して行なったが、遺構が調査区外に広がるのにあわせて、調査区を拡大したため、最終的には不整形のものとなってしまった。遺構面は第一面、第二面の二つ存在した。第一面からは遺構として土坑が三つと南北方向の溝が検出された。土坑1は長さ1.4m、幅0.7mの不整形で深さは11cm。後に述べるように多くの遺物が出土している。

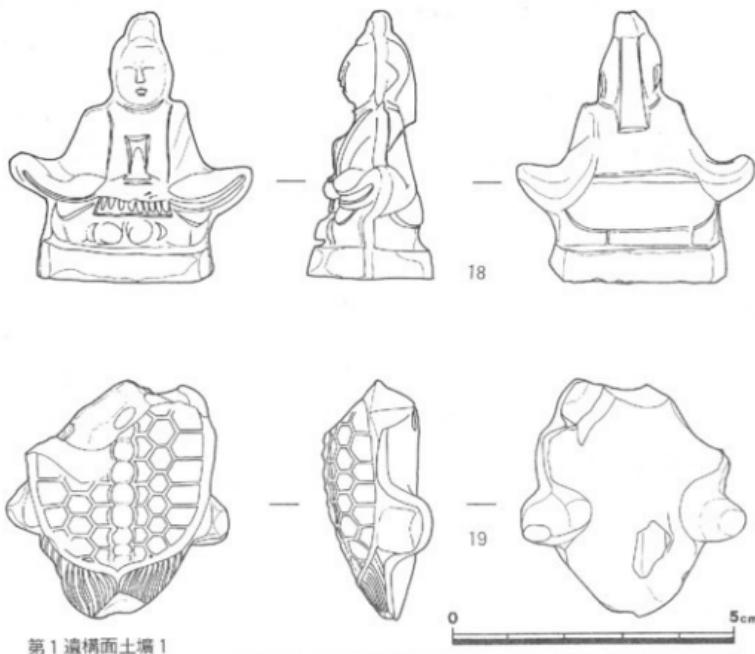
土坑2は直径1.1mの円形で調査区範囲の西側にさらにひろがっている。深さは50cm。土坑3は直径0.9mの円形で深さは15cm、やはり調査区の制限のために全掘できなかった。また溝1は調査区内において長さ2.7m、最大0.6mをはかる。南北方向の溝である。この溝は明らか



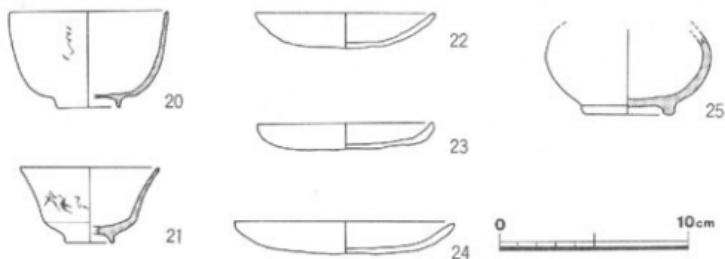
第5図 狹山藩陣屋跡 91-2区遺構平面断面図



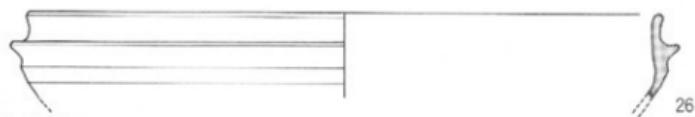
第6図 狹山藩陣屋跡9-2区出土遺物実測図(1)



第1遺構面土壤1



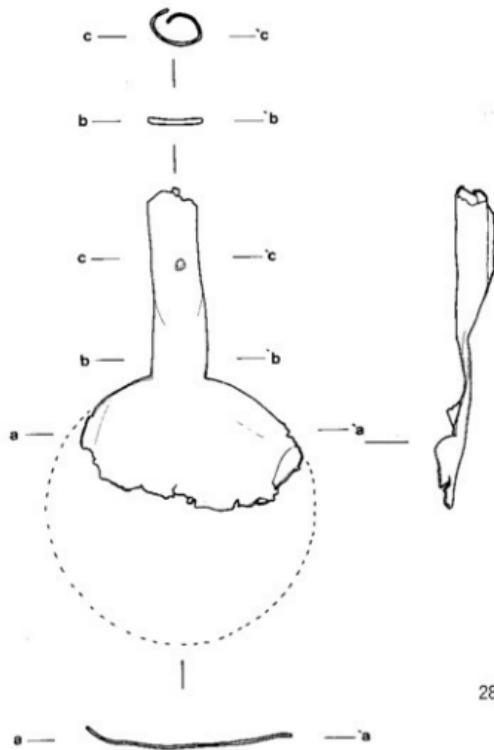
第2遺構面土壤3



第7図 狹山藩陣屋跡91-2区出土遺物実測図(2)



27



28



第8図 狹山藩陣屋跡 9 1 - 2 区出土遺物実測図 (3)

に第2遺構面の溝1に方向、長さとも規定されている。調査区の範囲も狭いためこれらの遺構が全体としてなにを示しているのかは明瞭ではないが、溝1において顕著にみられる第2遺構面の影響には注意を払う必要がある。第2遺構面は第1遺構面から20cm下がったところにおいて検出された。やはり土坑が三つ、溝が1本検出されている。土坑1は一边1.6mの正方形で深さ15cmである。内部にピットが三つある。土坑2は長さ2m、幅1.5m、深さ30cmである。土坑3はほんの一部が調査区内にかかっただけであるが長さ1.6m、幅0.5m、深さ60cmである。この土坑からも近世の遺物がいくつか出土している。溝1は長さ2.5cm、深さ40cmである。

次に出土遺物について説明したい。第6図の1～11は第1遺構面上層の包含層より出土した遺物である。1は有田焼の盃。無文である。2も有田焼の染め付け湯呑み茶碗。3は小型の壺の口縁部。4は有田焼の染め付け皿。5は白磁の茶碗。6は美濃焼、用途は不明である。7も美濃焼の小鉢。8は有田焼の小鉢。花の字が上絵付けされている。9は土師器小皿、10は有田焼染め付け茶碗、11は京焼の茶碗である。12～17は第1遺構面の土坑1より出土した遺物である。12、13はいずれも土師器小皿、ともに胎土が粗くやや不整形である。14は茶碗の蓋か。15は有田焼染め付け茶碗。16もやはり有田焼の皿。17も有田焼の茶碗であり、内面の文様は上絵付けである。

第7図の18、19は土人形。18には全体に緑釉がかかっている。像形から考えて天神像と考えられる。同種のものは江戸跡などからいくつか出土している。19は首から上がかけているが龜を模したものであろう。この土人形には底面に空気穴がみられる。20～26は第2遺構面の土坑3より出土している。20は白磁の茶碗。「ミタ」と赤の上絵付けが施されている。21は美濃焼の茶碗。22から24はいずれも土師質の皿。25は白磁。口縁がかけているが形態から考えて水差しかと思われる。26はほうらく。口縁部が二重になっているが、これは大量にはうらくが出土している堺環濠都市遺跡においてもあり類例のないものである。

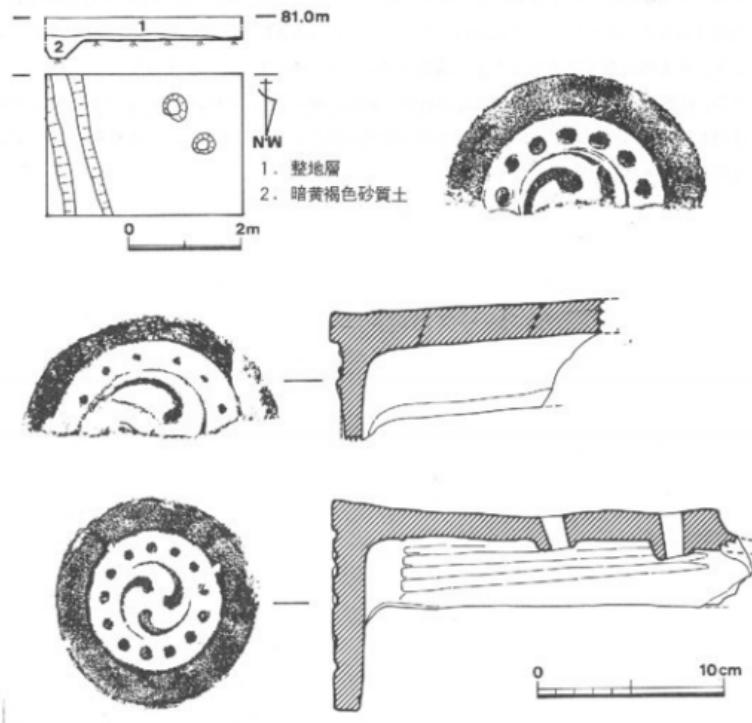
また第2遺構面の土坑2から銅製品2点が出土している。27はキセルの吸い口。28は杓子。木製の柄がついていたらしく柄部に装着用の穴が施されている。

遺物は全体的として近世後期を中心とするものであり、また遺物の構成から考えられる生活の様相は若干都市的な色彩はあるものの、付近の農村とそれほどの差があるものでもなかったようである。

#### (狭山藩陣屋跡 91-3区)

大阪狭山市狭山西四丁目2494-6 所在。現在もその建物が遺存する、狭山藩の武道場、擊劍道場の南側に調査地は位置する。建築計画に合わせて3.5m×2.5mの調査区を設定し、人力掘削を行なった。地表面から約30cmの深さまではコンクリート塊混りの整地層が、地表下約40cmの深さまでに厚さ約10cmの暗黄色砂質土の遺物包含層が存在する。この包含層の直下が地山面であり、遺構はこの面に認めることができる。調査区東端で南北方向に伸びる幅約0.8m・長さ(調査区内)約2.6m・深さ約30cmの溝を検出した。また、調査区東側で径約40cmのピットを

2箇所検出した。溝埋土からは三巴文の軒丸瓦1点と平瓦数点、湯呑み蓋1点が出土し、遺物包含層からは三巴文軒丸瓦と平瓦、土師器皿、陶器碗が出土している。この遺構は、出土遺物より近世末期の時期が与えられよう。



第9図 狹山藩陣屋跡 9 1 - 3 区遺構平面断面図・出土遺物実測図

### 3.まとめ

本年度も小規模な調査が主体となったが、いくつかの新たな知見を得ることができた。狹山陣屋跡91-1区においては、近世瓦を焼いたダルマ窯の下部構造を発掘することができた。狹山では古代以来須恵器生産や銅物生産など土を用いた生産活動が盛んであったが、近世・近代においても瓦やレンガ、ほうらくなどの生産地として知られていた。91-1区の成果は、狹山における生産活動を示す遺構として貴重なものとなろう。また91-2区においては有田焼など、土師小皿などに加えて、土人形が出土している。この調査区は、狹山藩士の屋敷地と考えられるが、武士の日常生活を知るうえで貴重である。91-3区は下級の藩士の邸宅の一部と考えられる。陣屋内部における家格の差と屋敷地の規模、出土遺物の内容の差異などは今後の重要な課題となるだろう。来年度以降も、市内での発掘調査をより充実させ、ささやかではあるが着実な成果をあげるべく努力していきたい。

# 図版



a. 遺構（全体）



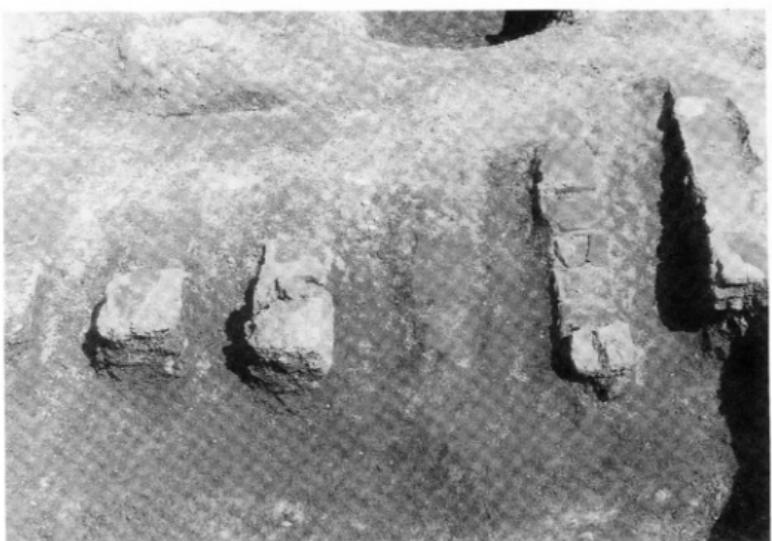
b. 遺構（瓦窯・南側上方から）



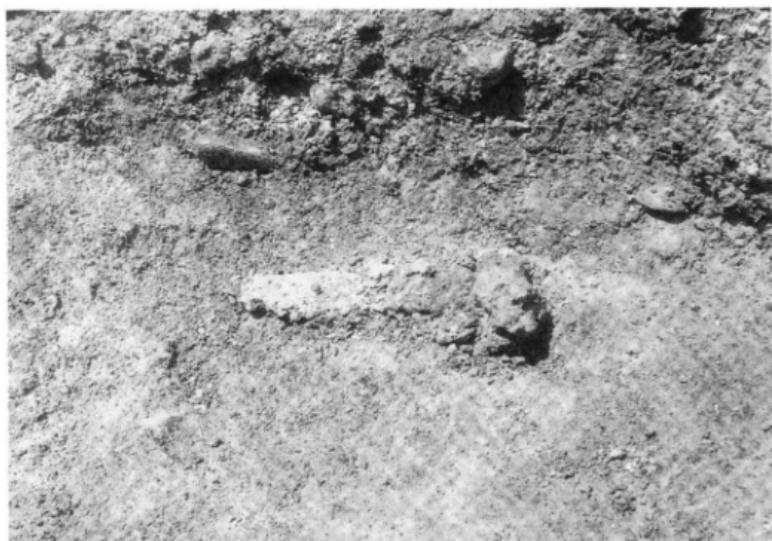
a. 遺構（瓦窯・東から）



b. 遺構（瓦窯・西から）



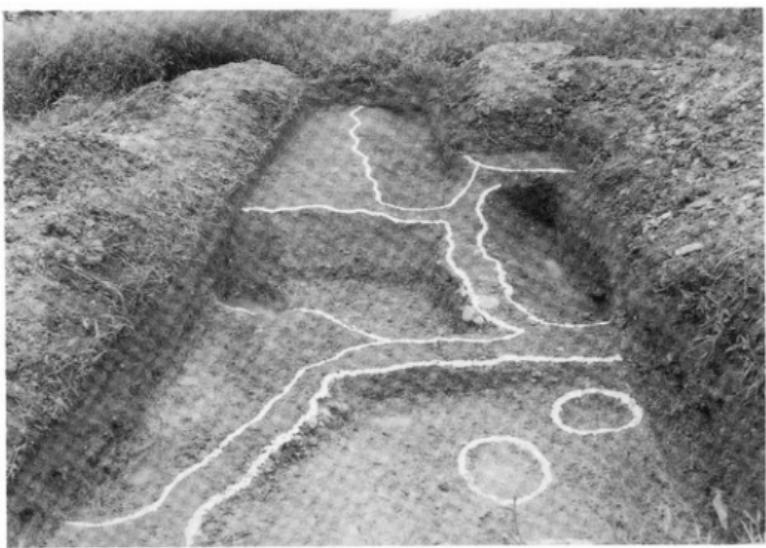
a. 遺構（瓦窯・分炎柱）



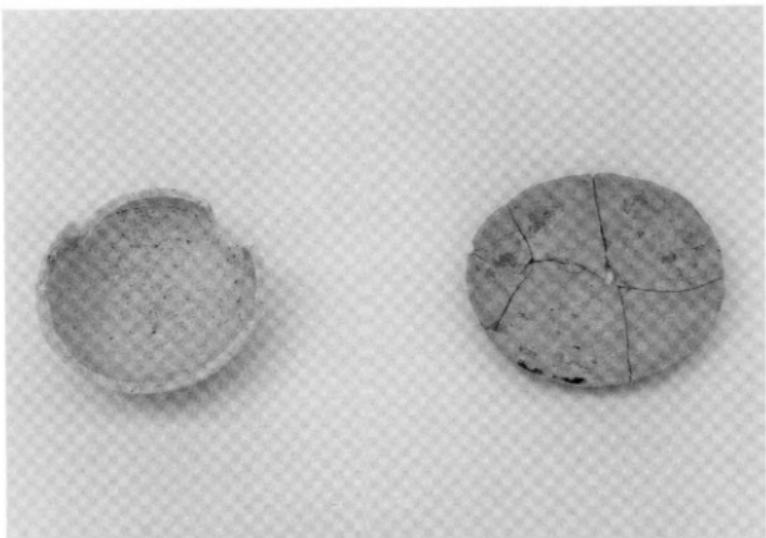
b. 鉄器出土状況



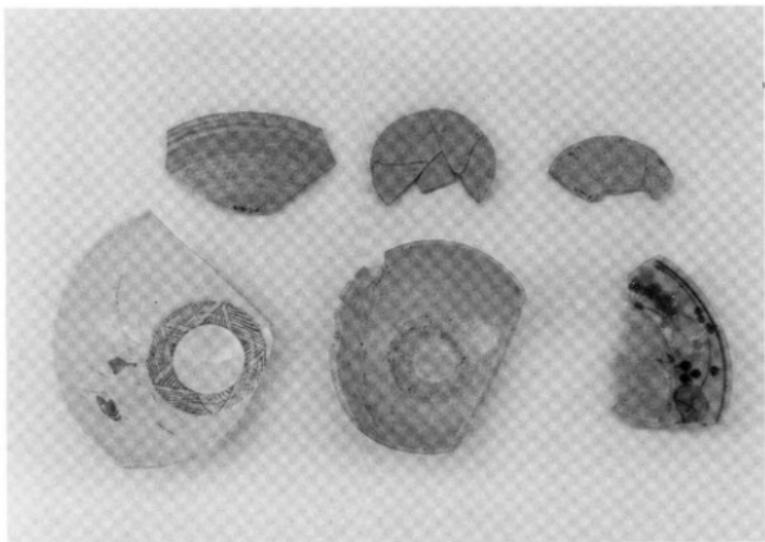
a. 第1遺構面（南から）



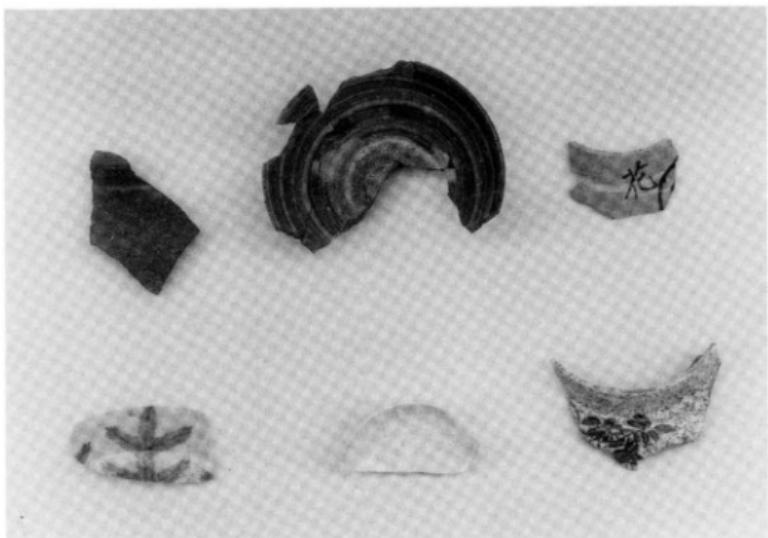
b. 第2遺構面（南から）



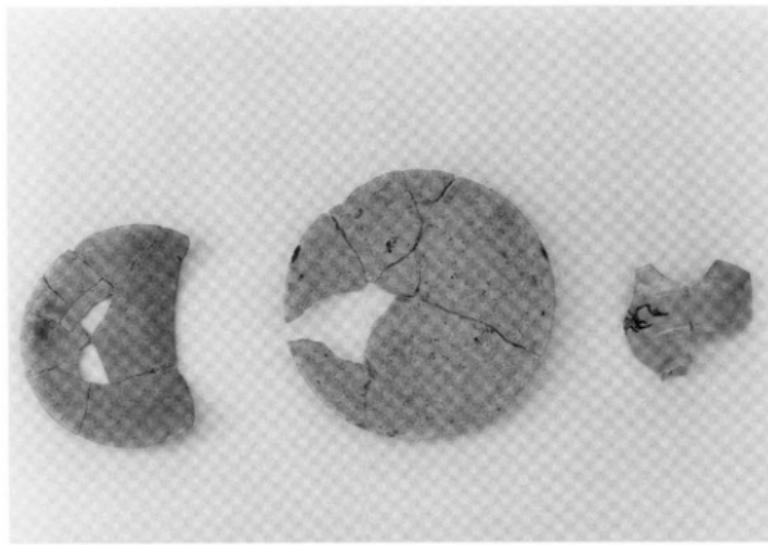
a. 遺物



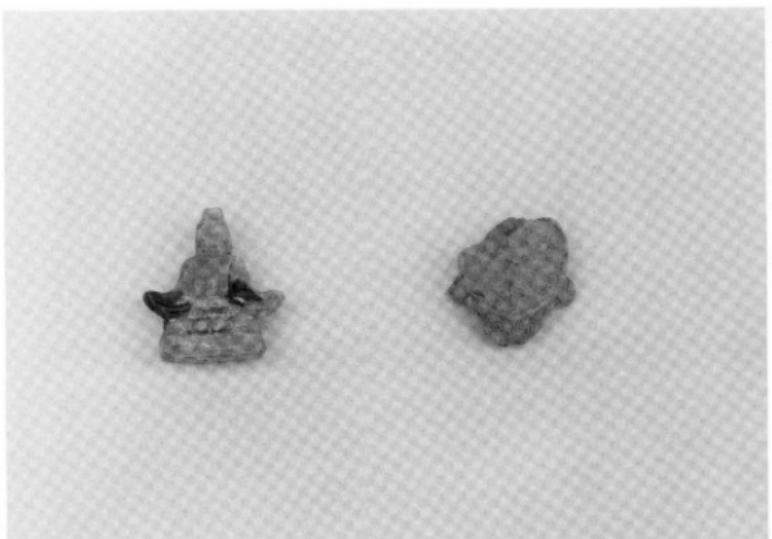
b. 遺物



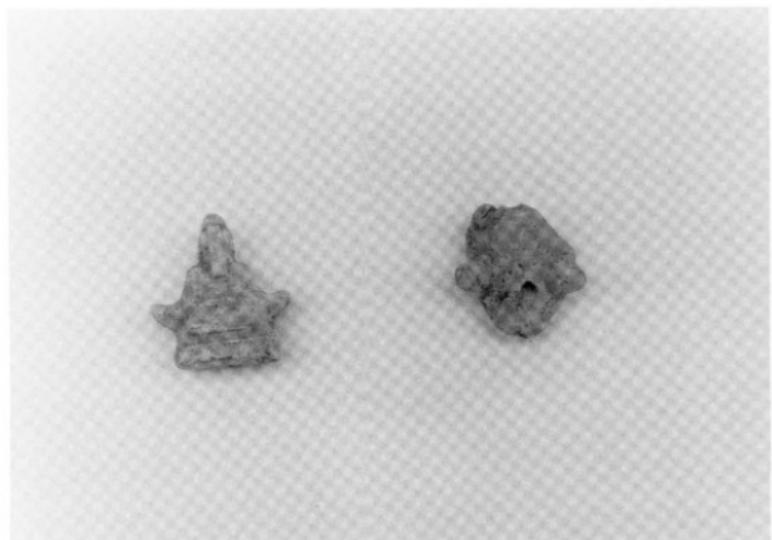
a. 遺物



b. 遺物



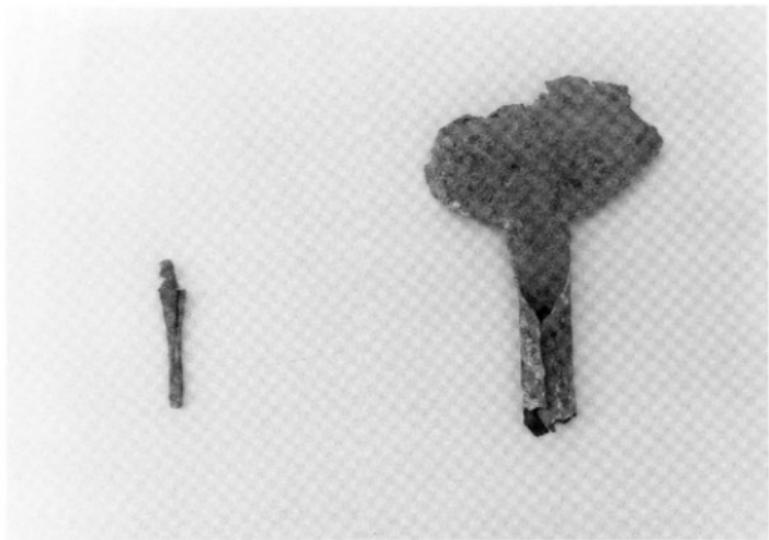
a. 遺物（土人形）



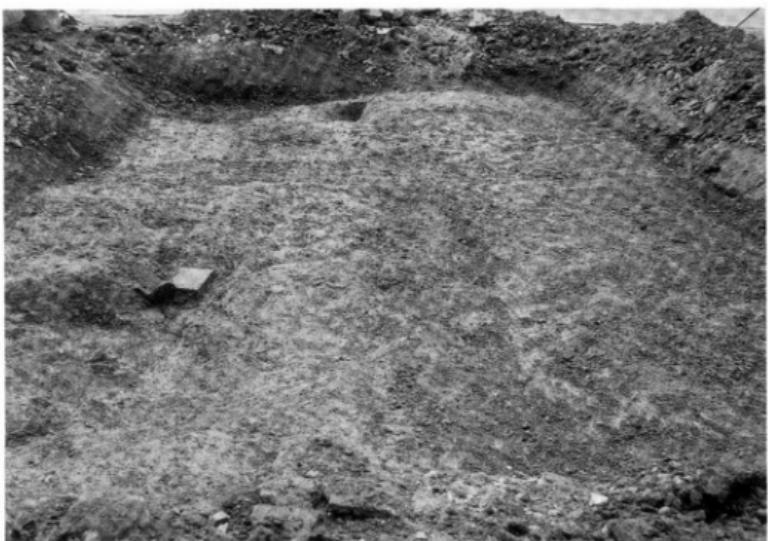
b. 遺物（土人形・裏から）



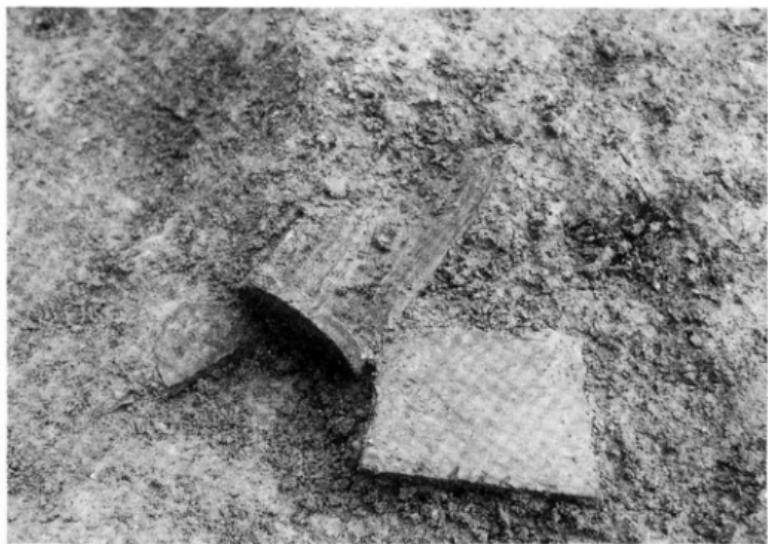
a. 遺物（銅器）



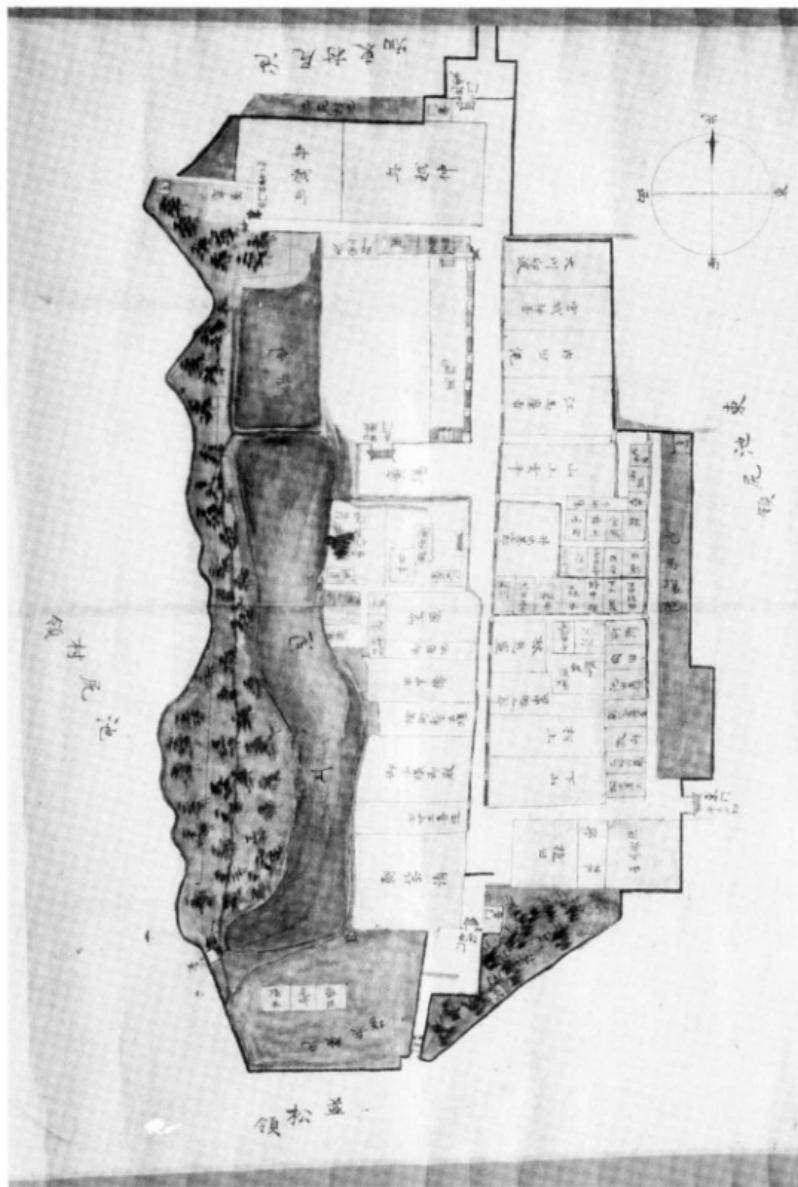
b. 遺物（銅器・裏から）



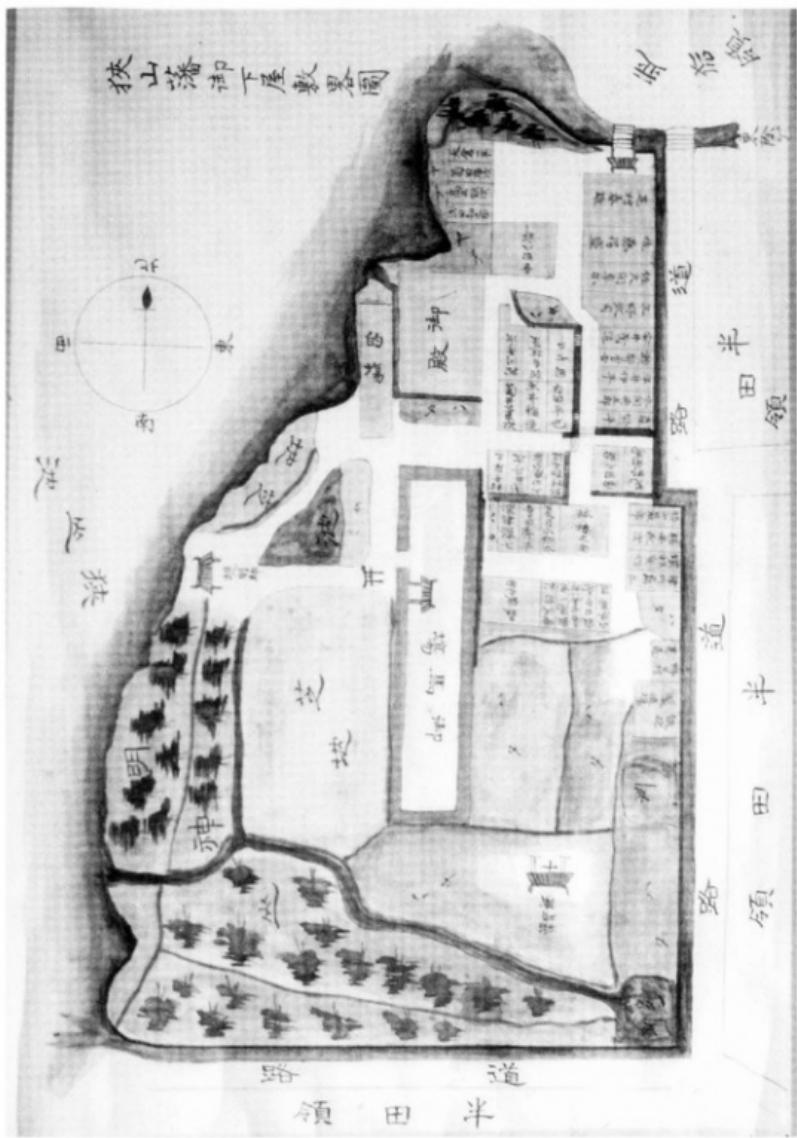
a. 遺構（全体）



b. 遺構（瓦出土状況）



圖版 12 狹山藩陣屢跡繪図・下屋敷



大阪狭山市文化財報告書 6  
大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書

発行日 1992年3月31日  
発 行 大阪狭山市教育委員会  
印 刷 橋本印刷株式会社

